

エジプト

なが さわ えい じ
長 沢 栄 治

はじめに

- I 政治
- II 経済
- III 社会
- IV 思想と運動

はじめに

最初に、今回の対象期間中に発表された単著形式の代表的な研究を示しておこう。伊能 [1993 c] と加藤 [1993 b] は、現在の日本におけるエジプト研究を代表する作品である。現代エジプト政治の体系的分析を試みた前者と、近代エジプト社会経済史研究の主題である土地制度史研究に新たな視点を提供した後者は、それぞれの専門領域で日本のエジプト研究の水準を大きく引き上げた。同じ年に出版された両書は、いずれも発展途上国研究奨励賞の選考において候補作に上がり、結局、後者が受賞した。

次に、少し範囲を広く取り、エジプトを主要な対象地域とした研究として、大塚 [1989] と小杉 [1994] があげられる。前者は、近年の日本の中東研究における人類学的接近の目ざましい発展を代表する作品であり、後者は、現代イスラーム政治研究における新しい理論的な枠組を提示した意欲作である。両書は、いずれも現代イスラームに関する日本ではじめての本格的

な研究書として評価されるであろう。前者は濫澤賞を、後者はサントリー学芸賞をそれぞれ受賞した。

最後に、同期間には、戦後日本における中東研究の先導者であった中岡と板垣の総括的な研究書が出版された（中岡 [1991]、板垣 [1992]）。これらの著作が例示するように、歴史学から出発した両者の研究において、エジプトは中心的な素材となった。中東の域内政治構造の多極化に伴う形で、日本の中東研究者の地域的分散が進んでいるようであるが、今後もエジプトは、まさにエジプト的なあり方で、豊かな研究素材を研究者に提供しつづけることであろう。

以下では、研究論文を中心に、「政治」・「経済」・「社会」・「思想と運動」のジャンルごとに主要な成果を紹介してみることにする。

I 政治

伊能武次は、伊能編 [1994] の「まえがき」で、日本の中東政治研究には、他地域と比較した場合、これまで政治学というディシプリンを意識した研究が乏しかったと指摘している。たしかに、エジプト政治に関しても、政治学の理論枠組に依拠した研究は、伊能 [1993 c] が登場するまで、鹿島 [1986] による欧米の研究の

レビューなど数えるばかりであった。その中で、かつて山根 [1986] によってナセル体制のマルクス経済学的な分析を行なった山根学が、権威主義的ポピュリズムの概念の検討を中心にしながらシリアとの比較で現代エジプトの政治体制の変容を論じた山根 [1994] を発表したのは、前述の伊能の期待に応えたものである。その他の政治学的研究として、1952年革命の展開に「開発独裁」の成立を指摘した富田 [1988] があるが、「開発独裁」概念の適用に関するより明確な理論的説明が望まれる。

政治研究の中で、外交史・国際関係的研究は、1980年代以降、とくに英米の外交文書の公開によって、新しい進展が見られた。スエズ戦争 (1956年) をめぐる佐々木 [1993] と鹿島 [1995] がそれである。また、1970年代以降、後述のイスラーム復興運動との間で宗派紛争が発生し、政治的な関心を集めた「コプト教徒と政治」というテーマについては、田村 [1986] と伊能 [1987] の研究がある。前者は国民統合の歴史的展開に、後者は現代エジプト政治における「宗派性の政治シンボル化傾向」に注目した研究であるが、いずれもコプト社会内部の階層変動に対する共通した関心が見られる。同じく、1970年代以降に注目された「複数政党制への移行と民主化問題」をめぐる問題に関しては、77年政党法の実証的分析を行なった白井 [1990] と複数政党制への移行にともなう選挙の実施過程を分析した伊能 [1993 a] の研究がある。

政治研究の最後にあげておきたいテーマとして、「中央—地方関係」をめぐる問題がある。他の中東諸国と比較した場合、きわだって中央集権的な国家体制をもつエジプトのこのテーマをめぐる研究は、おそらく日本の研究者の独自

な成果として評価されるのではないかと思う。地方行政制度を概観した伊能 [1993 b]、一面的で平板なエジプト社会像を批判し、定期市を事例にして「空間編成」の変容の分析を試みた加藤 [1993 a]、村長職をめぐる中央—地方間の権力関係の変容を制度史・政治階級・民衆文化の各側面から分析した長沢 [1994] が、それである。また赤堀 [1992] は、前述の民主化問題とも関連するが、国会議員選挙の実態を事例に遊牧民社会と中央政治との関係を描いた人類学者の報告である。

II 経 済

経済研究に関しても、政治研究の冒頭で述べたことと同様に、その文献数の多さにもかかわらず、現代経済学的手法に依拠した本格的な研究は、(エジプトのみならず中東全般に言えることであるが) 数少ない。しかも、残念ながら政治研究とは対照的に、今回の対象時期で見ると、この傾向に大きな変化はない。

現代エジプト経済を概観した研究書として、鈴木編 [1986, 1991] がある。鈴木編 [1986] は産油国への出稼ぎ労働がエジプト国民経済に与えた影響を扱い、鈴木編 [1991] は1952年革命と門戸開放政策という2つの変革期を視野に入れたエジプト経済入門書をねらったものである。

この時期、エジプト内外の経済研究者の関心を最も集めたテーマは、世銀・IMFの勧告に基づく構造調整政策の成否をめぐる問題であった。これをめぐっては、1960年代の「社会主義」的経済制度の強固さを指摘した清水 [1991, 1992]、一時期同政策適用の「成功例」とされて

いたトルコと比較し、外生ショックとの関係を論じた山田 [1990] が注目される。中村 [1991] は、構造調整との関係で財政金融問題を概観するのに簡便である。

また、経済史研究として、冒頭にあげた加藤 [1993 b] の他に、李 [1988] の銀行史研究、鹿島 [1987] の植民地行政に関する研究が発表された。

Ⅲ 社会

社会研究というこのジャンルをめぐっては、人類学・歴史学・社会学・文学など多彩な手法にもとづく研究が、数多く発表された。人類学では、前掲の大塚 [1989] を筆頭にして、遊牧民の出自意識を分析した赤堀 [1994] や、週市をめぐる社会関係を考察した奥野 [1990] などの成果が出された。上エジプトを事例にしたこの奥野 [1990] の実態調査は、前出のナイル・デルタの歴史研究である加藤 [1993 a] と対をなす農村市場に関する研究としても位置づけられる。また、加藤 [1988] は、農村社会研究において、歴史学者が行なうフィールドワークの方法論的可能性を論じた興味深い論考である。

農村研究と並んで、都市社会、とくに都市化をめぐる問題に関しても、いくつかの社会的な研究成果が発表された。店田廣文は、人口センサスの分析で一連の成果を出しているが、その中でも1986年センサスを用いて「カイロ圏」の都市社会がもつ地域的特質を多変数解析の手法を用いて明らかにした店田 [1991] は、かつてアメリカの都市社会学者アブー・ルゴドが行なった研究と比較しうる有意義なデータを含んでいる。また、都市移住者の同郷者団体（ガマ

イーヤ）をめぐる試論的な研究、店田 [1993] も興味深い。同様の問題を扱った研究として、上エジプト農村と同地域出身のアレキサンドリア市港湾労働者社会における復讐慣行（サル）の変容の分析を通じて、都市化と社会的連帯の関係を考察した長沢 [1991] がある。小杉泰によって翻訳された Wikan [1980 (1986)] は、都市下層女性の間社会関係を描いた作品として示唆に富んでいる。その他、佐藤 [1988] の都市システム論にもとづく都市化の分析がある。

女性・家族問題については、泉沢編 [1993] の文献解題が、この時期の最大の成果である。その他、身分法改正問題を扱った長沢 [1987] がある。文学研究においては、奴田原睦明に続く新しい世代の研究が見られた。岡 [1992] のユースフ・イドリース論、八木 [1991] によるナギーブ・マフフーズ研究、そして高野晶弘による翻訳 (Maḥfūz [1948 (1990)], 高野訳 [1944]) がそれである。とくに高野訳 [1994] は豊かな民族誌的資料に富んでいる。以上の他、エジプト社会を文明論的に概説した本として小杉 [1988] が出版された。

Ⅳ 思想と運動

最後に、上記の分類を越えて横断するジャンルとして、イスラームをひとつの軸とする「思想と運動」という研究領域を設定してみた。1970年代後半以降、社会のほとんど全ての領域で顕著となった「イスラーム復興」現象に関しては、小杉 [1994] と飯塚 [1993] が扱った「シャリーアの実施」をめぐり考察が、まず取り上げられるべきである。前者は、シーア派イランと対比する視角から復興運動の政治理論を提起し、

後者では、「イスラーム国家」をめぐる体制側と運動側間のイデオロギー論争が紹介されている。中心的な運動組織、ムスリム同胞団については、小杉編 [1989] が基礎的研究として重要である。近年の武装闘争集団の思想分析については、内部資料を用いた中田 [1992] がある。

思想史の分野では、松本 [1988] と飯塚 [1991] が、既存の欧米の研究史の批判の上に立ち、オラービー革命前後のムハンマド・アブドゥを異なった角度から取り上げた。前者は、行政官としてイスラーム改革を行なう彼の活動に表われた思想的実践を、後者は、イスラーム復興を提唱するその思想的核心をそれぞれ分析している。アフマド・アミンに関する翻訳、Amin [1950 (1990)] と訳者の解説、水谷 [1994] も貴重な貢献である。

民衆とイスラームの関係というテーマをめぐることは、大塚 [1989] によるウラマーと民衆という二項対立的図式の批判がまず参照されるべきである。その他、古林 [1986] の神秘主義教団の研究、湯川 [1993] の現代ウラマー研究も興味深い。

民衆運動研究では、加藤 [1990] による農民運動の分析モデルの提示、Barakāt [1987 (1991)] の近代農民反乱史の翻訳が出された。また、長沢 [1990] が考察した資本主義論争と共産主義運動の関係をめぐる問題は、1960年代以降の体制イデオロギーと密接な関係を持つ主題である。

以上に加えて、最後に文献案内の作業結果として、近現代エジプト史に関する東アラブにおける社会変容の諸側面研究会編 [1989] と Barakāt [1987 (1991)] が出版されたことを最後に指摘しておきたい。

〔文献リスト〕

赤堀雅幸

- 1994 「アスル——エジプト地中海沿岸のベドウィンに見る祖先と自己との関係の表現」『民族学研究』58(4) 1994.3: 307-333.
1992 「1990年エジプト人民議会選挙と遊牧民アウラード・アリー」『日本中東学会年報』(7): 355-394.

飯塚正人

- 1993 「現代エジプトにおける二つの『イスラーム国家』論——危機の焦点『シャリーアの実施』問題を巡って」伊能武次編『中東諸国における政治経済変動の諸相』アジア経済研究所: 47-74.
1991 「オラービー運動期におけるムハンマド・アブドゥフ——シャリーアを巡る戦い」『オリент』33(2) 1991.3: 20-35.

泉沢久美子編

- 1993 『エジプトにおける女性——文献サーベイ』(文献解題38) アジア経済研究所.

板垣雄三

- 1992 『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』岩波書店.

伊能武次

- 1993 a 「エジプトにおける複数政党制の試みと選挙」小田英郎・富田広士編『中東・アフリカ現代政治——民主化・宗教・軍部・政党』勁草書房: 4-34.
1993 b 「エジプトの中央・地方関係」伊能武次編『中東諸国における政治経済変容の諸相』アジア経済研究所: 125-157.
1993 c 『エジプトの現代政治』朔北社.
1987 「イスラム化とコプト・ムスリム紛争——エジプト」宮治一雄編『中東のエスニシティ——紛争と統合』アジア経済研究所: 137-164.

伊能武次編

- 1994 『中東の国家と権力構造』アジア経済研究所.

- 大塚和夫
1989 『異文化としてのイスラーム——社会人類学的視点から』同文館。
- 岡 真理
1992 「ユースフ・イドリースの文学における初期短編小説の特質——リアリズムを中心に」『日本中東学会年報』(7): 1-38.
- 奥野克己
1990 「上エジプトの定期市——アスワン県の事例」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「イスラム圏における異文化接触のメカニズム」プロジェクト班『イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究2』: 17-145.
- 鹿島正裕
1995 「スエズ戦争(1956年)と米国・エジプト関係」『金沢法学』37(1) 1995.1: 37-68.
1987 「植民地支配の政治経済学——イギリスのエジプト統治 1882-1914年」『金沢法学』29(1・2) 1987.3: 165-208.
1986 「エジプト国家論の展開」日本政治学会編『第三世界の政治発展』岩波書店: 69-86.
- 加藤 博
1993 a 「エジプトにおける社会経済変動と空間編成の変容——近代エジプト『定期市』研究序説」伊能武次編『中東諸国における政治経済変動の諸相』アジア経済研究所: 75-124.
1993 b 『私的土地所有権とエジプト社会』創文社。
1990 「近代エジプト農民運動についての覚書——農民運動から見た近代エジプト社会の変容過程」長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所: 261-297.
1988 「エジプト農村史研究序説——聞き取り『カフル・ショブラフүүл村の村方騒動』、『アブー・スイネータ村醜聞』、『東洋文化研究所紀要』[東京大学] (106) 1988.3: 269-338.
- 小杉 泰
1994 『現代中東とイスラーム政治』昭和堂。
1988 『エジプト・文明への旅——伝統と近代』日本放送出版協会。
- 小杉 泰編
1989 『ムスリム同胞団——研究の課題と展望』国際大学国際関係学研究科。
- 古林清一
1986 「近代エジプトにおけるスーフィー教団について」『国立民族学博物館研究報告』11(3) 1986.2: 781-802.
- 佐々木雄太
1993 「イギリスとスエズ戦争」『名古屋大学法政論集』(146) 1993.3: 1-102.
- 佐藤克彦
1988 「エジプトの都市化と人口移動」河邊宏編『発展途上国の都市システム』アジア経済研究所: 117-146.
- 清水 学
1992 「『アラブ社会主義』論の再検討」清水学編『アラブ社会主義の危機と変容』アジア経済研究所: 3-36。
1991 「エジプトの構造調整——『受身』から『挑戦』へ」『現代の中東』(11) 1991.9 (中東レビュー 1991年秋): 15-25.
- 白井正博
1990 “On the Egyptian Political Party Law of 1977.”『日本中東学会年報』(5): 253-280.
- 鈴木明編
1991 『門戸開放下のエジプト経済』(アジアを見る眼83) アジア経済研究所。
1986 『エジプト経済と労働移動』アジア経済研究所。
- 高野晶弘訳
1991 『黒魔術——上エジプト小説集』第三書館。

- 店田廣文
1993 「エジプトの首都カイロにおける同郷者団体についての覚書」『社会科学討究』[早稲田大学] (114) 1993.12: 445-462.
- 1991 「エジプト都市の分類——『カイロ圏』の諸都市を事例として」『日本中東学会年報』(6): 35-54.
- 田村愛理
1986 「近現代エジプトにおけるムスリム=エジプト紛争——国民統合の視点から」『日本中東学会年報』(1): 34-61.
- 富田広士
1988 「エジプト・1952年革命における社会経済改革の位置」『法学研究』[慶応義塾大学] 61(5) 1988.5: 267-292.
- 中岡三益
1991 『アラブ近現代史——社会と経済』岩波書店.
- 中田 考
1992 「エジプトのジハード団——思想と歴史」『中東研究』(362) 1992.1: 5-14.
- 中村玲子
1991 「財政・金融と経済構造改革」鈴木編 [1991]: 106-138.
- 長沢栄治
1994 「近代エジプトの村長職をめぐる権力関係」伊能編 [1994]: 147-214.
- 1991 「都市化と社会的連帯——上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会の事例比較」加納弘勝編『中東の民衆と社会意識』アジア経済研究所: 211-262.
- 1990 「エジプト資本主義論争の構図と背景」長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所: 102-257.
- 1987 「エジプトにおける家族関係の近代化」『現代の中東』(2) 1987.3: 14-32.
- 東アラブにおける社会変容の諸側面研究会編
1989 『文献解題——東アラブ近現代史研究』(文献解題33) アジア経済研究所.
- 松本 弘
1988 「ムハンマド・アブドゥフのイスラム改革——その思想と制度的・法的改革運動」『日本中東学会年報』(3)2: 1-42.
- 水谷 周
1994 “Ahmad Amin on Civilization.”『日本中東学会年報』(9): 67-92.
- 八木久美子
1991 「エジプト社会の近代化とアイデンティティの模索——ナギーブ・マフフーズの場合」『日本中東学会年報』(6): 67-94.
- 山田俊一
1990 「外生ショックと途上国の政策反応——エジプトおよびトルコの比較」堀内昭義編『国際経済環境と経済調整』アジア経済研究所: 311-355.
- 山根 学
1994 「エジプトとシリアにおける政治過程」伊能編 [1994]: 35-79.
- 1986 『現代エジプトの発展構造——ナセルの時代』晃洋書房.
- 湯川 武
1993 「現代エジプトの宗教と政治——シェイフ・シャアラウイーの政治的意味」小田英郎・富田広士編『中東・アフリカ現代政治——民主化・宗教・軍部・政党』勁草書房: 35-55.
- 李 修二
1988 「第一次大戦前におけるエジプトの不動産抵当銀行——地主制と外国資本」『土地制度史学』(119) 1988.4: 1-17.
- Amīn, Aḥmad
1950(1990) *ḥayātī*. Cairo: Maktaba al-Nahḍa al-Miṣriya (『アフマド・アミーン自伝』水谷周訳 第三書館).
- Barakāt, ‘Alī
1987(1991) *intifādāt al-fallāḥīn fī miṣr al-ḥadīth 1769-1952*. (『近代エジプトにおける農民反乱——近代エジプト社会史研

究入門』加藤博・長沢栄治訳・解題 ア
ジア経済研究所)

Wikan, Unni

1980(1986) *Life among the Poor in Cairo.*

London : Tavistock Publications. (『カ
イロの庶民生活』小杉泰訳 第三書館)

Maḥfūz, Majīb

1948(1990) *al-Sarāb.* Cairo. (『蜃気楼』高野
晶弘訳 第三書館)

(東京大学東洋文化研究所助教授)